

平成27年度専修大学スポーツ研究所研修会報告  
石川県・星稜高校／金沢星稜大学訪問

# 金沢星稜大学人間科学部・専修大学スポーツ研究所 情報交換会

日 時： 2016年1月28日（木）10時00分～11時40分

訪問先： 金沢星稜大学人間科学部スポーツ学科

内 容： オリンピック・パラリンピックと大学スポーツ、地域と大学のスポーツにおける連携など

参加者： 11名

金沢星稜大学

池田 幸應 教授（人間科学部長）、井上 明浩 教授（人間科学部スポーツ学科長）、

大森 重宜 教授、奥田 鉄人 教授、杉林 孝法 准教授（以上、スポーツ学科）

北陸学院高等学校

宮田 佳恵 教諭（硬式テニス部顧問）

専修大学スポーツ研究所(SUIS)

佐藤 雅幸（経済学部教授・SUIS所長）、野呂 進（商学部教授）、佐藤 満（経営学部教授）、李 宇諤（法学部准教授）、

富川 理充（商学部准教授、○報告者）

## 1. 金沢星稜大学人間科学部の概要

2016年に創立50年目を迎える金沢星稜大学は、1967年に単科大学の金沢経済大学として開学し、2002年に現在の大学名へと名称変更された。人間科学部が新設されたのは2007年と比較的最近のことである。人間科学部には「スポーツ学科」と「子ども学科」が設置され、1学年の定員は各学科60名ずつの120名であり、大学全体としても経済学部の380名を合わせて500名である。学生数からすると専修大学の1/8の規模となる（2016年度より、人文学部（定員75名）が新設される）。

開学当初から学生の出身地は地元の金沢市や石川県がほとんどであり、今でも多くの学生は地元出身者であるとのこと。しかしながら、人間科学部が新設されて以降、徐々に全国から受験生が集まるようになり、それに伴い、偏差値のレベルも上がり、受験者数も急速に増加しているとのことである。

キャンパスはJR金沢駅より車で15分ほどの、高校野球・サッカーで有名な星稜高校の通り向かいに位置していた。アクセスはいいとは言いが、周辺には学生向けのアパートや、スーパー、コンビニ、レストランも充実しており、学生には生活しやすい環境に見受けられた。訪問当日は天候に恵まれたが、その前の週はかなりの降雪があったようで、この時期は雪に悩まされることも度々あり苦労されているようであった。また、近くに自然地が残る中、周辺は街区や住宅地として利用され、キャンパスを拡張することは困難な状況であり、立地は必ずしも良いとは言えない環境である。

## 2. スポーツ学科の特徴

### （1）指導者（教員）の力を生かす

人間科学部が新設された以降は受験生も増え、全国から学生が集まるようになるなど、大学全体にいい影響が波及している。立地や施設な

どいわれるハード面でハンディキャップを負っている逆境の中において、それはなぜなのか。新学部設立そのものも理由の一因となったようではあるが、教育内容や指導者の力・専門性を存分に生かせるようにと、特にソフト面の充実に注力していることが大きいようである。

金沢星稜大学人間科学部スポーツ学科には17名の教員（特任教授・講師3名、助手1名含む）が所属しているが、オリンピックやJOC（Japanese Olympic Committee）、JPC（Japanese Paralympic Committee）に携わる教員が6名在籍している。もともと母校が星稜高校であったり石川県出身であったりと縁深い人材も多く、取り分けそのような人材を集めたわけではないとのことではあった。それでも首都圏にある多くの大学よりも高い比率ではないだろうか。地方にいながら中央の最新の情報に生で接する機会が多い教員が、各々の専門性や経験を生かした授業展開を行う。スポーツ学科では、理論もさることながら、実技や実習、演習を特に大事にしているということであった。

また、以前より中学・高校の保健体育教諭免許状や日本体育協会公認スポーツ指導員資格が取得可能となっているが、2014年には新たに特別支援教育課程が設けられた。それにより、特別支援学校教諭の免許状取得や中級障がい者スポーツ指導員、健康運動指導士の資格を目指す科目が拡充された。在学中にスポーツに関するより多くの資格取得が可能となった



写真1. 星稜高校・中学からみた金沢星稜大学



写真2. 情報交換会の様子

り、より幅広い視野を持てるようになったりすることは、学生にとってみれば、将来に向けて多くの選択肢を持つことができるようになったといえる。これらも、所属する各教員の特長や専門性を前面に押し出し、学生によりよい授業を提供しようと推し進めてきた結果ということだそう。

## (2) 地域連携、地域社会の中で学ぶ

金沢星稜大学は、地域の発展に資する知の創造を目指し産学官連携事業を推進（金沢星稜大学HPより）するために、もともと経済研究所としてあった組織を2007年度より総合研究所へと発展的に改組し、さらに2012年4月には地域連携センターを開設し、大学を挙げて地域貢献活動を推進するための支援を行っている。

スポーツ学科においては、その地域連携センターが共催となり、高大連携や石川県のスポーツ振興への寄与を期待し「星稜スポーツシンポジウム」を主催するなど、積極的に地域連携を図る活動を展開している。しかしそれ以上に、カリキュラムの中に必修科目として、地域社会をフィールドに、実践的な学びや人間関係の構築、社会での役割を実体験する（金沢星稜大学HPより）プログラムが組み込まれていることが特徴的な取り組みとして挙げられる。2年次にはフィールド基礎演習として、地域で開催する様々なスポーツイベントに関する情報を収集し調査や研究を行い、3年次にはスポーツフィールド演習として、実際に地域の様々なスポーツイベント活動へ運営やボランティアとして参加するのだそう。学生時代の多くを過ごすキャンパスを飛び出し、いずれ誰もがその一員として生活することになる地域社会を学びのフィールドとする。キャンパスで学んだ知識を実社会の問題解決にどう生かすか、自分はどのような役割を担うことができるのかなど、地域社会と深く関わる経験を通して実践的な能力の開発を図っているということである。このような取り組みが功を奏してか、最近では、スポーツ学科の就職率も9割を超えてきているそう。

## (3) 地方と首都圏のハブを目指す

地域連携、地域貢献を重要視しているのと同じに、(1)にも記載したが、実技や実習、演習科目を大事にしているとのこと。一地方にあるどちらかというと小規模の大学であり、施設も恵まれていない環境にはあるが、保健体育関連の教員免許状やスポーツ指導員の資格も取得可能で、将来は教わる立場から教える立場へ進む学生もいるのでそれは外せない、とのことであ



写真3. 情報交換会終了後、参加者全員で金沢星稜大学玄関の前にて

った。夏期にはマリン実習、春季にはスキー実習も実施している。

スポーツ学科の教員には中央の競技団体やJOC、JPCの活動に関わる方が多い。まさに強みと言える。情報という面に関しては、現在はICTが普及しておりさほど問題にはなっていない。寧ろ、地方にいながら中央の競技団体等に積極的に関わることで、さらにはその役職や理事を担うことまで見据えている。これらの取り組みを通して、基本的には中央から地方への情報の流れを、時には地方から中央へ、また地方から地方へと流動的にすることを考えている。そのような環境を整えていければ、例えば、中央ではあまりにも過密となった、あるいはあふれてしまった学生を受け入れたとしても、彼ら彼女らを不幸せにせず社会に送り出すことができる。様々なハンディキャップを負っている中で、強みを最大限に生かす方法として、金沢星稜大学人間科学部スポーツ学科は、まさにその専門分野においてハブ機能を持つ大学の一つとなることを目指していた。

さらに最近では、部活動での指導にも力を入れ始めているとのこと。高校はスポーツ、特に野球やサッカーでは全国的に有名校であるが、大学の体育会の部活動は学生の自主運営が主体となっている。当初はそれでも活発な活動をみせていたが、スポーツ学科の教員が携わっていない部活において、徐々に生活時間が不規則となり、部活動はおろか、学業にまで支障をきたす学生が見受けられるようになってきた。そのために最近では、出来るだけスポーツ学科の教員が顧問として部活に携わるようにし、大学スポーツにおいても、まずは地域や地方の中でハブ機能を持ち、徐々に活性化させていこうと取

り組みを始めたところのことである。

また、国内だけではなく、上海体育学院と学生や研究、教員の交流の協定を締結されたり、近い将来にはスポーツ関連の大学院の設置までを視野に入れたりしているとのことであった。

## 3. 所感

交流会に参加された先生方、学生や大学、あるいは自身の専門に対する熱意によって少々過大解釈をしてしまったくらいは無きにしも非ずだが、そこで話されたことは全く現実味のないものには感じられなかった。これまでも、実情に合わせた改革に取り組み実現されてきた事例が幾つもそこにあったからだろう。

教員が外部から評価を受けて各々フィールドを広げて活動している状況、スポーツ分野においてハブ機能を持ち学生に還元しようとしているところなど、当研究所と合致していることも多く、具体的な取り組みの一つ一つが非常に参考になった。規模が小さく地方にあることを逆に上手く活用し、小回りを利かせて様々な改革に取り組みしており、また地域連携と中央との連携をうまく融合させた活動を目指していることが良く理解できた。

当研究所の強み、弱みを再度見極め、学生ファーストを考えた際に、何が実現可能か考えて取り組む必要を再認識するに至った。